

地域づくり(岡山倉敷市)の現場から

開55 原 孝史



原 孝史(開55)・・・学術修士

岡山県倉敷市出身・在住

岡山県倉敷青陵高校卒業

経歴・・・

1982年4月 倉敷市役所入庁

2016年4月 都市計画部長

2017年4月 建設局長

2020年6月 倉敷市副市長

九州工業大学 大学院工学府・後期

博士課程在籍中

- 1、はじめに
- 2、ものづくりの仕事
- 3、戸畑区仙水町での思い出
- 4、倉敷市について
- 5、まちづくりの現場から「都市計画」と「都市の計画」の違い
- 6、平成30年西日本豪雨からの復興
- 7、地域発展の基礎づくりを担う技術屋として

昭和56年3月に九州工業大学開発土木工学科(水工研究室・浦研究室)を卒業し、農家の長男という因果から卒業と同時に地元に戻る必要に迫られ、出身地である岡山県倉敷市役所に技術員として採用されました。それから地方公務員として、38年間行政職土木技師(一般職)として倉敷市役所で働いてまいりました。60歳で定年退職していたら、市長から呼び戻されて、現在、技術担当の副市長(特別職)として倉敷市役所に勤務しております。

(図-1) 倉敷市の組織 170を超える部署

企画財政局	総務局	市民局	環境リサイクル局
- 企画経営室 - 財政課 - 情報政策室 - 公有財産活用課 - 市民活動推進課 等	- 総務課 - 人事課 - 法制課 - 防災危機管理室 - 契約課 等	- 市民課 - 生活安全課 - 税制課 - 市民税課 - 資産税課 等	- 環境政策課 - 環境衛生課 - 産業廃棄物対策課 - 下水経営計画課 - 下水建設課 等
保健福祉局	文化産業局	建設局	水道局・消防局
- 保健福祉推進課 - 障がい福祉課 - 保育・幼稚園課 - 介護保健課 - 国民健康保険課 - 保健課 等	- 文化振興課 - 観光課 - スポーツ振興課 - 国際課・商工課 - 農林水産課 等	- 事業推進課 - 都市計画課 - 道路管理課 - 土木課・住宅課 - 公共建築課 等	- 水道総務課 - 水道管理課 - 水道建設課 - 消防総務課 - 危険物保安課 等
教育委員会	市長公室・議会事務局	各支所	(参考) 資格職 等
- 人権教育推進室 - 教育企画総務課 - 生涯学習課 - 市民学習センター - 中央図書館 等	- 秘書課 - くらしき情報発信課 - 議会総務課 - 議事調査課	- 水島・児島・玉島支所(市民課・産業課・建設課・福祉課 等) - 船橋支所 - 茶屋町支所 等	- 消防職(各消防署) - 保育教育職(幼稚園・保育園 等) - 栄養士(小学校 等) - 保健師(保健所 等)

© 2024 Kurashiki City

倉敷市役所の組織は(図-1)、令和5年度(2023)の職種別職員数は(表-1)のとおりで、事務系

(表-1) 倉敷市役所の職種(R4)

事務職：1378人	行政運営全般に関わり、幅広く様々な業務を行います。
技術職(※)	
土木 310人	土木工事の設計・施工監理、維持管理に関する業務や都市計画の企画・調整など
建築 67人	公共建築物の設計・施工監理、既存建築物の耐震化事業や建築・開発の許可など
電気 49人	公共建築物の電気設備工事に関する計画・設計・施工監理など
機械 46人	公共建築物の機械設備工事に関する計画・設計・施工監理など
化学 44人	大気・水質の測定や分析、環境保全活動の推進、産業廃棄物処理業等の指導監督など

※土木技師、建築技師、電気技師、機械技師、化学技師 合計：516人
保健師、栄養士、看護師、消防職、保育教育職、環境整備員 合計：732人

© 2024 Kurashiki City

行政職員が1378名、土木技術職員は310名です。組織構成については、市役所ごとに違って、政令市、中核市という都市の規模によっても異なりますが、倉敷市役所の技術系職員の大まかな職種は、建設系では土木技術職、建築技術職、機械・電気技術職、化学職で、合計で516名になります。

令和6年度の当初予算(一般会計・特別会計含む)は4,188億円、職員総数は3,509名(教育職・医師含む)です。現在、倉敷市では九州工業大学出身の職員は私を含め

て3名の職員が在職しております。かつては、行政技術職として機械職と化学職に先輩が在籍されていました。

2、ものづくりの仕事

高校生になり普通科に進学したものの、将来具体的に何をやりたいのか決めかねていました。親からは家業である農業は継がなくていいと言われており、法律や経済はどうもピンとこなかったので、将来は「ものづくり」の仕事をしよう、それでもできれば大きなもの（ダムや橋梁）を造りたいと思うようになり、工学部で建築か土木の分野に興味を湧きました。そうこうして選んだ土木技術屋稼業でしたが、市役所採用直後は、農林水産部で農業用水路の補修の業務に携わるようになりました。農業水路をはじめとして、ため池の設計・施工管理が中心の仕事ですが、規模が小さく補修工事ばかりだったのでかなり不完全燃焼な毎日でした。その後、人事異動で都市計画課に異動になり、50歳を目前にした課長職になるまで、土地利用計画の立案や都市施設の計画、市街地開発事業などのいわゆる法定都市計画の仕事を中心

に仕事をする事になりました。「人間がつくる最も大きな器は都市である」と勝手に解釈して「やりたいこと（おおきなものをつくる）」を仕事に携わることができたように感じています。

この間、倉敷市は平成14年4月に保健所を有する中核市に移行していましたが、その当時、市役所全体をプランニングする仕事をする企画政策室の勤務も土木技術職として4年間経験しました。

3、戸畑区仙水町での思い出

昭和52年3月末に、生まれて初めて実家を離れ、北九州市戸畑区に引っ越して4月から明専寮（S4棟・401号は寮長室）にお世話になりました。そして部活動は中学生のときから続けている卓球部に入れていただき、先輩の皆さま方に心身ともにしっかり鍛えていただけたことが今日の地方公務員人生の基礎になっていることは間違いなく、とても感謝しています。入学当初の1年生から、解析学や構造力学、物理学実験といった工業系単科大学ならではのハイレベルな科目についていくのにも

必死だったことをよく覚えています。

寮生の時代には学内に住んでいたこともあり、通学という感覚はなく大学が棲家みたいなものだったので、当時の寮で一緒だった開発土木工学科の同級生とはいまでも親交が続いております。本年5月25日には博多で昭和52年入学の開発土木工学科の同窓会が開催され、23名の同級生が近況を報告しあい親交を深めました。（写真1）また、卓球部では2年生からは卓球部長として北九州インカレ、全九州大会や八大学戦などたくさん試合に参加・運営させていた

ただき、責善会の活動を通じてリーダーシップやチームワークの大切さ組織運営のイロハを学びました。

4、倉敷市について

関東圏で「倉敷市はどんな町かご存じですか？」と聞くとたいしては「歴史的な町ですよ。」という答えが返ってきます。では、歴史的な町はどうしてできてきたのかとなると、ここでは紹介しきれないこととなります。では、歴史的な町並みはどうして残ってきたのかと聞かれると、それは「地域の人々が意図して



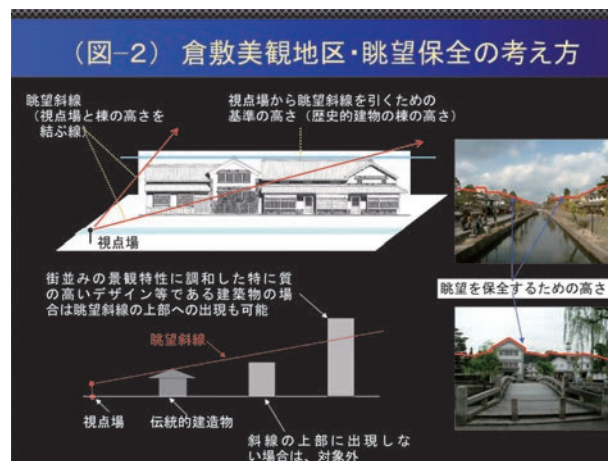
残してきたのです」という答えをすることができず。地域の住民と市役所が力を合わせて歴史的な町並みは大事だとの共通認識のもと歴史的景観を保全してきました（写真1）。

この歴史的町並み景観も実は都市計画として、保存型の都市計画（景観地区―伝統的建造物群保存地区）と景観法に基づく景観計画を定めたうえで、地域の建築活動等が良好な景観を形成していくための決められたルールに従って建築活動を行うこと

で形成されてきたものです(図-2)。
こうした地域づくりという意味で「地域づくりの現場」という表現をしています。ものづくりといっても製造業ではないですが、建設系の地方公務員としての携わることのできる職域は地方自治体内ではとても広いというのが実感です。

5、まちづくりの現場から「都市計画」と「都市の計画」の違い

昭和59年に都市計画が担当となり、まず職場で渡されたのが五千ページの「都市計画法令要覧」でした。大



学時代の法学概論だけでは歯が立たず、生まれてはじめて有斐閣発刊の法律専門書を買って独学の日々でしたが、現場の土地利用計画の変更作業は、政治的な意思と国土利用計画との矛盾の間で困難を極める土地利用計画づくりとなり、都市政策の困難さに気づいたのでした。

ちょうどその頃、横浜市で先進的な都市政策を進めておられた横浜市企画調整局長の田村明さん(後に、法政大学教授)とお話することができ、「都市計画」と「都市の計画」は一字違うと大違いということの意味を教えてくださいました。後に「都市を計画する」という著作をまとめられ世に問われています。これは、役所では法定(都市計画法)都市計画が「都市計画」だけれど、市のまちづくりの現場では「まちを計画的につくる」ことは「(法定)都市計画」だけではとうていできず、市役所の都市づくりを担当している職員が創意工夫して「まち(都市)」を「計画的につくらなければ」本当の「都市を計画」することにはならないということなのです。このことを教えていただいたことで、仕事のモ

視覚的に最も効果の高い道路舗装の美化化【グレー色】

舗装材料の工法の種類(3種類)



(写真-2)

ヤモヤが雲散霧消して私はとても元気になることができ、倉敷のまちづくりをいかに計画的に進めていくかをじっくりと考えられるようになりました。平成17年に国が景観法を定めたことで、地方自治体は景観計画をつくることが出来るようになりました。倉敷市では、昭和25年から地域の住民が独自に美しい町並みを作ろうとして住民活動を開始していたこともあり、倉敷市で昭和の時代からつくっていた景観形成のための条例を再整備しつつ、国の法律を活用し倉敷市市景観計画をつくりました。この倉敷市市景観計画には、伝統的

道路面の舗装材の配色と無電柱化による景観形成



な町並みの景観的な保全のために、建造物の町並みのそのものとそれらの背景もコントロールするという眺望保全の考え方を取り入れています。フランスで採用されているフュゾー規制の手法で、景観の修景技術ですが、この規制技術を景観工学として応用して、倉敷美観地区の歴史的景観保全を行っています。

この景観計画づくりには、委員会を組織し東京大学工学部の西村幸雄教授(元東京大学副学長)に委員長に就任していただき、建築家の内藤

廣さんにも多くの示唆をいただきました。から計画づくりを進めました。この

景観計画の仕事が担当させていただけたのは、都市計画課に在籍していたときに技術士試験を受けて建設部門の都市及び地方計画を専門とする資格を得ていたこともありました。

景観計画も「都市の計画」であり視覚的環境計画だからだと考えています。

この景観計画に沿って、倉敷市美観地区（面積約21ha）では電線類の地中化事業を進め、また、景観上大きな視覚的構成要素である道路面の舗装にも倉敷市独自の美装化ルールを内規で作成し実践しております。

昨年の令和5年に区域内の主要な道路の電柱を取り除き、近世以降の倉敷の伝統的な町屋の家並みがすっきりとした姿になりました（写真12）（写真13）。

6、平成30年西日本豪雨からの復興

建設局長の任にあたっていた平成30年、真夏の7月、西日本豪雨が発生しました。倉敷市では2日間年間降水量の約3割に相当する降雨があり、7月6日には平成25年の制度運用開始以来、岡山県で初めて大雨

特別警報が発令されました。

倉敷市真備町では、国管理河川の高梁川水系小田川をはじめ県管理河川の末政川、真谷川、大武谷川において8カ所で堤防が決壊し、7カ所で一部損壊・損傷となり、真備町4、400haのうち約1、200haが3日間00haにわたって完全に水没し、5、700棟超の住家が全壊・大規模半壊・半壊となる大規模な水害が発生しました（写真14）。



この水害の発災直後から倉敷市災害対策本部でインフラの復旧に走り回ることになりました。そのうちに

復興計画をつくれということで、担当局長となり約7カ月の時間を要しましたが、ちょうど定年退職の3月末日に倉敷市真備地区復興計画を上程して38年間の地方公務員生活にピリオドを打ちました。

この戦後のわが国の最大の水害とも言われる被害の中で、社会生活の基盤であるインフラの被災状況把握のために、堤防破堤から約12時間後に破堤堤防上空から真備地区の浸水状況をドローンで空撮し、その空撮写真データをもとに浸水想定区域図（NHK「ニュースウォッチ9」で

放映）の作成をしました。これは、技術屋の直感に近いものもありましたが、ちょうど放送大学大学院で取り組んでいたGIS（地理情報システム）が活用でき、水害による浸水被害状況の可視化が復旧復興活動に直結するという確信がありました。

浸水被害の可視化には、倉敷市が作成した都市計画図や家屋調査等のために撮影した空中写真等を活用し、避難・救助、復興、復旧に必要な情報共有を行い、浸水想定区域図の作成や通行可能な道路を示す幹線道路網図、浸水家屋の位置図、仮設トイレ

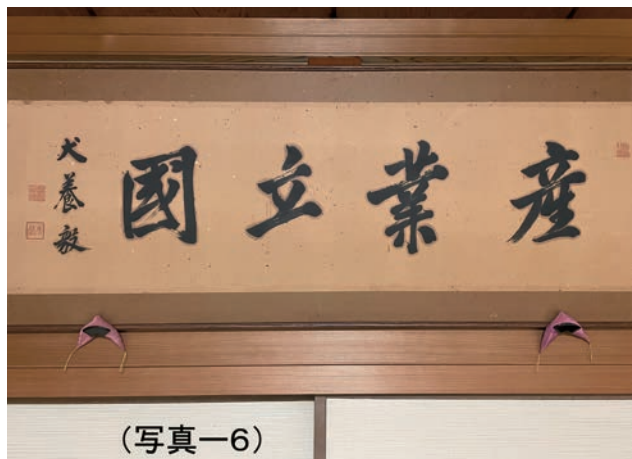


レ設置位置図、災害ゴミ仮置き場位置図、被災河川の復旧状況図などの発災直後から必要とされる地図データの提供を行い、迅速な復旧復興活動に活用しました。（写真15）

皆さまのご支援もあり、本年3月には高梁川の河川改修も終え、復興計画策定から5年の歳月で真備地区の復興事業は完成することができました。

7、地域発展の基礎づくりを担う技術屋として

九州工業大学の正門をくぐると明



(写真-6)

治専門学校の創立に功績のあった先人の銅像が目に入ります。この銅像の前を通るたびに思いだすのは、明治から昭和にかけて活躍した岡山県出身の政治家犬養毅です。5・15事件で凶弾に倒れた犬養毅が好んで書いた揮毫に「産業立国」という言葉があります。(写真-6) 明治大正昭和のわが国の進むべき道を論じた言葉と理解しています。

この言葉のとおり明治時代の倉敷では紡績業が興き、化学繊維メーカーへと発展していきました。この化学繊維産業の発展に母校出身の卒業生が大きく貢献していることを明

業生が大きく貢献していることを明専会発刊の書籍で10年ほど前に知りました。倉敷市内の酒津工場でビニロン実験プラントをつくり、はじめて国産ビニロンの工業化を成功に導いた友成九十九博士がこの地にいたこと、そして地元化学繊維産業の発展に大きな貢献をしていたことを内心とても誇りに感じています。

そして、現在、倉敷市には水島工業地帯が立地しています。昭和39年(1964)に新産業都市として指定され、重化学工業をはじめとする自動車、鉄鋼、造船等の主要製造業が立地し、245社、従業員2万5千人を抱え、岡山県の製造品出荷額の46%を占める3兆2千億円(令和2年)を稼ぎ出しています。さきほど紹介した歴史的な町の顔とは別の工業都市の姿がここにはあります。

水島工業地帯が形成される前は、JR倉敷駅周辺には地元の繊維産業を支える企業である紡績工場や化学繊維メーカーなどがありました。現在は移転しており、現在、工場敷地はショッピングセンターやくらしき未来公園となっています。昨年10月、倉敷駅前のホテルで開催された明専

会岡山支部の総会に出席しましたが、岡山県関係の九州工大OBの皆さま42名がご出席され、市内の企業にたくさん関わられておられることも心強いことです。

基礎的自治体である倉敷市が担う地域の社会基盤整備の一端を紹介させていただきましたが、われわれ技術系公務員が担うインフラは道路、河川、港湾、上下水道、教育文化施設、廃棄物処理施設など多岐にわたり、幅広い分野でそれぞれに専門的に技術職員が携わっています。さらに、近年は災害の頻発を受け、防災のための国土強靱化のための事前防災の取り組みなど、目の前には多くの社会的・技術的課題があります。

その意味で、私は市役所の行政職技術職員は幅広く、日常・非常時を含めオールラウンドに技術的な見識を持つことが大切で、技術を以って市民の暮らしを守り豊かにすることが本務と感じております。このことはまさに、九州工業大学で論された「技術に堪能なる土君子」という専門の一針に感謝する今日この頃です。



昭和52年開発土木工学科入学・同窓会

(写真-7)

